



できごと

「伊豆のくに昔ばなし大学基礎コース」の第1回が、3月25日・26日に伊豆の国市で開催されました。昔ばなし大学は、小澤俊夫氏を講師として、1992年より全国44か所で開講され、「昔話とは本当はどういうものかということを中心に学び、子どものために昔話絵本や昔話本の良し悪し、再話の良し悪しを見分ける目と耳を養うこと」を目的としています。年2回、1回6コマ(1コマ80分)で、3年継続の内容です。昔話の語りの語法や昔話が語る子どもの成長について、多くの具体例とともに分かりやすく話していただきました。2日間びっしりの内容でしたが、174名の参加者は熱心に耳を傾け、ノートを取っていました。(裏面に、概要を紹介します。)

子ども図書研究室のテーマ展示

ただいま展示中です!

「海の本」
「ピーターラビットの世界」と「ホフマンのグリム童話の世界」 子ども図書研究室講座 関連資料 - 新着図書も常時展示中です。

イベント情報

子ども図書研究室講座

児童文学作品の魅力について、その舞台や風物をスライドでとりながらの講義を行います。

講師：池田 正孝氏

(東京子ども図書館理事、中央大学名誉教授)

日時・演題：5月26日(金)

(1) 10:00~12:00 「ピーターラビットの世界」

(2) 13:00~15:00 「ホフマンのグリム童話の世界」

会場：静岡県立中央図書館

定員：各50名(中学生を除いた15歳以上の方対象)

申込み：電話、FAX、メールまたは直接県立中央図書館へ。

申込み・問合せ先：静岡県立中央図書館企画振興課

TEL:054-262-1246 FAX:054-264-4268

Eメール:mailmaster@tosyokan.pref.shizuoka.jp

新着図書から

絵本

『あいうえかきくけ

どうぶつえん』



音羽正 / 著

文芸社

2006年1月

物語

『風のシャトル』



山崎玲子 / 作

和田春奈 / 絵

国土社

2005年12月

「あいうえ あひるが みずあそび おいけ
ではしゃいで ぐわっぐわっぐわっ」

あひる、かば、さるなどの動物たちが、あ行から「ん」までのリズムカルな詩にのせて、次々と登場する絵本。詩と絵が見開きで、シンプルに描かれている。親子で楽しく歌えるよう、巻末に楽譜もある。

動物の絵を見ながら、おかあさんが口ずさんであげたい温もりのある本。著者は小学校の音楽専科教諭を経て、童謡を創作、現在はピアノ塾を開く。【幼児から】 (宮崎)

中学1年生の主人公カンナは、バドミントン部で仲よしの垂矢とダブルスを組むことになった。実はもっと上手な同級生とダブルスを組んで、大会に出たいと思っていたカンナと、家庭の事情で「朝練」にも出て来られない垂矢との間には、次第に溝が生まれてくる。最終的には、父親との小旅行が主人公の心のわだかまりを溶かすのだが、友人や家族との関わりの中で変化する主人公の感情を丁寧に追いかけており、共感できる。試合の流れなどもテンポよく描かれ、興味深い。【小学校高学年から】 (鈴木)

第1回 伊豆のくに昔ばなし大学 報告

第1回目は、開講の趣旨、語りの文法・語りを志す人のために、昔話が語る子どもの成長、昔話の語法の6コマであった。

講義「昔話が語る子どもの成長」の内容を紹介する。子どもや若者を主人公とした昔話は、その主人公が変化しながら成長する姿を語っている。例えば『ヘンゼルとグレーテル』で当初グレーテルは泣いてばかりいるが、最後には1人で魔女をやっつけてしまう。実人生の成長は時間がかかり、親や大人には認識しにくい成長の変化を「昔話」では短いお話にして、「子どもが育つということはこういうことだ」という例を語っているのである。

人間間は一生寝ているわけではなく、眠い時期があり、たっぷり寝た後だから良い知恵が浮かぶのだ、と語っているのが『三年寝太郎』である。大人になると眠かった若い時期のことを忘れてしまう。「昔話」は、個人が忘れてしまったことを民族の記憶として覚えていてくれるものだとも言える。

また、子どもは自分の獲得しているものとちょうど合致するものと出合った時、それを身につけ次の段階に有効に進むことができる。このことを語っているのが『わらしべ長者』である。わらを持っている時に1つ飛び越えてみそと出合っても何も得られない。成長には時があり、時を待つことが大切である。今の日本では早い時期にできるようになることが良いこととされがちである。しかし、「三つ子の知識百まで」という言葉はない。「三つ子の魂百まで」という言葉はふさわしくない時期に無理に知識を与えて、魂を壊してしまったら百まで壊れてしまうとも考えられるのである。

そして、若者の振り子が振れている様子を語っているのが『シンデレラ』である。シンデレ

ラが3回お城へ行くのはなぜか？ 若者は普段は汚い姿で暮らしている（大人から見たら悪いことをする）が、時には本当の美しい姿をとりたいたいと思う。そして、その本当の姿を大人たちに認めてもらいたいと思うが、認めてもらうとなぜか元に戻ってしまう。まるで振り子のように行ったりきたりするのである。このような、大人になると忘れてしまう若者の姿を描いているのではないか、ということである。

小澤氏著作の『昔話が語る子どもの姿』（古今社）では、昔話そのものを取り上げながらわかりやすく書かれている。

その他「語りの文法・」の講義では、昔話に共通する文法、例えば「実態を抜いて語る」（残酷と思われる場面を写實的に語らない）など、具体的な昔話を例に取り上げての講義であった。すべての講義が濃密で、どれをとっても今後の講義がたいへん楽しみである。

問合せ：伊豆のくに昔ばなし大学実行委員会
TEL/FAX 055-966-6337（立脇英子氏）
第1回の授業を実行委員会指定の日時・場所でビデオ受講すれば、2回目からの受講も可能。参加費10,000円。（受講料8,500円＋2日目の昼食代1,500円）

所蔵資料から

絵本 『へっこきよめさん』



おざわとしお / ぶん
からさわかおり / ぶん
はなのうちまさよし / え
くもん出版

2005年11月

子どもとよむ日本昔ばなしシリーズの1冊。器量が良くて働き者のお嫁さんの顔色が悪くなってきたので、心配したおっかさんがそのわけをきくと...。耳で聞いて分かりやすい語り口で書かれている。

（殿岡）

*表紙画像はすべて出版社の許可を得て掲載しています。